

映画『パール・ハーバー』の社会・政治的考察

高成田 享

米国のメモリアルデー（戦没将兵記念日、こ
としは5月28日）を前に、制作費1億4000万
ドル（約170億円）を投じた大作『パール・ハ
ーバー』が封切られ、社会的な「事件」として
メディアに取り上げられている。日本の真珠湾
攻撃から60年後のいま、この映画がどんな社
会・政治的インパクトをもつのか、及ぶ範囲が
広いので、Q&Aのスタイルで考えてみた。

Q：客の入りは？

A：メディアがいっせいに取り上げたこともあ
り、私が見に行ったワシントン市内の映画館は、
初日（5月25日）の夜のチケットは、前日に売
り切れていた。いつもは見られないチケットを
買う行列ができたが、2年前の『スター・ウォ
ーズ』の新作のときの行列よりはずっと少なか
った。早計は禁物だが、『タイタニック』や『ス
ター・ウォーズ』に比べれば、興行成績は落ち
るのではないかな。

Q：観客や批評家の反応は？

A：主人公のアメリカのパイロットが日本の戦
闘機を撃墜するシーンなどでは拍手と歓声が起
きたが、『スター・ウォーズ』の熱狂に比べれば、
静かなものだった。たしかに、米国にとっては
「負け戦」で、手をたたいて喜ぶようなシー
ンが少なかったが、映画全体としても大きな感
動を観客に与えたともいいがたい。映画が終
わったあとの最後の拍手も、まばらだった。批
評家の映画評も辛口のものが多く、「真珠湾は、
日本軍の攻撃のあとには、批評家からの激しい
攻撃を受けるだろう」という予測もあった。

Q：どんな物語なの？

A：テネシー州の農村に育った飛行機好きの幼
友だちの二人がそのまま米海軍のパイロットに

なり、ひとりの美しい看護婦に恋をし、「三角関
係」で、仲たがいますが、日本軍の真珠湾攻撃
でともに戦うことで、友情は復活、2人はドー
リトルの東京空襲に飛び立っていく……。パイ
ロットが恋と挫折のなかで、成長していく物語
という意味では、『トップガン』であり、40分
に及ぶ真珠湾攻撃のスペクタクルは、『タイタ
ニック』の沈没シーンや、『セイビング・プ
ライベート・ライアン』を想起させる。

Q：なぜ、いま、真珠湾なのだろうか？

A：原作を書いたランドル・ワレスは、ディ
ズニー社から話が持ち込まれたと語っている
ので、配給会社のウォルト・ディズニー社が企
画、『ブレイブ・ハート』など戦争ものを手
がけたワレスが原作を書き、『アルマゲドン』
で特撮を駆使した危機映画を成功させたマイ
ケル・ベイが監督をすることになった。ディ
ズニーの意図は不明だが、真珠湾の歴史が若
い世代から薄れていくなかで、米国が世界
大戦に参戦するきっかけになった真珠湾を歴
史のなかに、しっかりと位置づけておきたい、
ということだろう。

Q：ディズニーが戦争映画というのは意外感
があるね。

A：ウォルト・ディズニー自身は、第2次
世界大戦中の1943年に『空軍力の勝利』と
いうアニメーション映画を上映、近代戦にお
ける空軍力の重要性を説いた。この年の米英
首脳会談で、英仏海峡の制空権をとること
の重要性を、ルーズベルト米大統領にわか
らせようとしたチャーチル英首相は、この
映画を取り寄せ、大統領に見せたという。こ
れがきっかけで、翌年のノルマンジー上陸
作戦で、米国は十分な空軍力を提供した、
というエピソードが伝えられている（ボブ・
トマス著『ウォルト・ディズニー』）。また、

ディズニーは戦後、ハリウッドで反共運動を手がけた「アメリカの理想を守る映画人同盟」でも積極的に活躍している。インターナショナルな娯楽を提供するディズニーの持つもうひとつの顔であった保守的な側面が、今回の映画で先祖がえりのように出てきたともいえる。

Q：日本への反発や警戒心が米国内で強まることはないの？

A：日米間が貿易摩擦など緊張している時期ではないので、この映画からただちに「日本への警戒心を怠るな」というメッセージは伝わってこない。しかし、日米が戦った太平洋戦争の歴史を宣戦布告なしに日本が奇襲攻撃をかけた真珠湾の1点に凝縮して描いた映画が当時の歴史の文脈を伝えているとは思えない。もちろん、随所に日本への敵意の言葉が出てくるのは、当時の雰囲気伝えるためだろうが、日本人から「シナ人」とか「第三人」といった言葉を中国人が聞きたくないように、「ジャップ」という言葉を聞くのは気持ちのいいものではない。映画の最後のナレーションでは、「ダーティー・ジャップ」という言葉があり、日本版では、「ダーティー」という言葉が消えるのだそうだが、商売優先のダブルスタンダードという気もする。

Q：日本の描写はフェアなものか。

A：日本が米国などの禁輸措置によって追い詰められ、戦争によって突破口を開き、資源を確保するしかない、といった状況説明が日本の軍人から語られるが、その舞台装置が野外の陣幕みたいななかで、とても現実離れしている。ルーズベルト大統領など米国側はリアルに描いているので、よけいに日本の舞台の荒唐無稽が目立つ。ハリウッドが日本を描こうとすると、いまだにこの程度の水準というのは、情けない。

Q：日系アメリカ人などの反応は？

A：この映画にいちばん神経質になっているのは日系アメリカ人だろう。日系人という理由だ

けで、強制収容された歴史があるのだから当然だ。すでに、強制収容の歴史や、日系人が志願兵として米国に協力したことなどの歴史が触れられていないと批判している。

Q：いまの中国を当時の日本になぞらえる議論もあるようだね。

A：ウォール・ストリート・ジャーナル(5月14日)に、明治維新から太平洋戦争に至る日本の歴史を、社会主義市場経済に移行した鄧小平以降の中国になぞらえるロバート・パートレイ氏のエッセーが載っていた。大恐慌で景気が悪くなるなかや、欧米諸国が関税を引き上げて保護主義に傾くなかで、日本は軍国主義に走り、最後に米国などが経済制裁で日本を追い込んだことが戦争の引き金になった、という歴史から、中国を過度に追い込むな、という主張だ。「中国を追い込むな」という主張は、中国にとってありがたいメッセージだろうが、戦前の日本になぞられるのは迷惑だろう。しかし、『パール・ハーバー』を見たアメリカ人のなかには、当時といまの日本人は違うという印象よりも、東洋人は昔もいまも何を考えているかわからない、という印象を抱くとともに、中国を思い浮かべる人もいたのではないだろうか。

Q：まさか、中国の奇襲を注意せよ、というのが隠されたメッセージではないだろうね。

A：そんな意図があるはずもないが、ブッシュ大統領が誕生して以降の米国をみていると、ことさらに中国を軍事的な脅威として強調しているように思えることがある。クリントン政権時代よりも、アジアへの米国の軍事的な傾斜は強まると思う。アジアをにらむ真珠湾(アジア太平洋艦隊)の重要性がましていることが確かで、その意味では、米軍のアジア太平洋におけるプレゼンスを強めるための原点ともいえる映画がいま出てきたことは、歴史的な意味あいがあるのかもしれない。(2001/5/30)

